様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月　９ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ２００６２

研究課題名（和文）インドネシア都市部におけるカフェ・ブームはコーヒー栽培地域に何をもたらすか?

研究課題名（英文）What does a cafe boom in urban Indonesia bring about to coffee growing areas?

研究代表者
島上　宗子（Shimagami, Motoko）

愛媛大学・国際連携推進機構・教授

研究者番号：９０４４７９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、インドネシアの都市部におけるサードウェーブ系カフェの急増に注目することで、インドネシアの社会変化を捉えるとともに、こうした急増が、生産者がより主体となった、持続可能なコーヒー・サプライチェーン創出につながる可能性を検討した。主たる調査地としたマカッサル市では2015年頃から若者らがカフェ・焙煎所を開き、良質の豆を求めて生産者と直接取引する「関係コーヒー」が活発化した。有数のコーヒー生産地トラジャでは豆の集荷・精製への若者の関与や、農民組合の組織化など新たな動きが確認できたが、コーヒー生産が農家家計に占める割合は高くはなく、農家の後継者問題は引き続き課題であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、コーヒーに着目することで、過去20年にわたって民主化と経済成長が進んできた新興国インドネシアにおける社会変化（中間層の成長と特徴、若手起業家たちの動向、国内市場の成長、都市－農村関係）を明らかにした。他のコーヒー産出国（ベトナム、ラオスなど）との比較を通じた考察も可能であり、東南アジア地域研究における意義は高い。また、より公正で持続可能なコーヒーのサプライチェーンに関する研究は数多いが、大企業や援助団体、政府主導ではなく、都市の小規模な若手起業家と農村部のイノベーターらによる連携による新たなサプライチェーン創出の実態を明らかにしたものは少なく、学術的・社会的意義は高い。

研究成果の概要（英文）：By focusing on the rapid increase in the number of third-wave cafes in urban areas of Indonesia, this study captures the social changes in the country and examines the possibility that this rapid increase will lead to the creation of a sustainable coffee supply chain in which producers take a more active role. In Makassar City, the main research site, “relational coffee,” in which young people open cafes and roasteries and deal directly with producers in search of quality beans, has become active since around 2015. In Toraja, one of the world-famous coffee-producing areas, new trends were observed, such as the involvement of young people in bean collection and processing, and the organization of farmer associations, but it was clear that coffee production does not account for a high percentage of farm household income and that the issue of succession of coffee farmers continues to be a challenge.

研究分野：東南アジア地域研究

キーワード：コーヒー　都市・農村関係　サプライチェーン　インドネシア　農業後継者問題

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

コーヒーは、熱帯地域で生産され、主に先進国で消費されてきた代表的な産物の一つである。アフリカ原産といわれるコーヒーは、西欧列強による植民地体制下にあった 18～19 世紀、西欧での需要拡大をうけ、宗主国がアジア、ラテン・アメリカの属国で次々と栽培を開始する形で世界各地に急速に拡がっていった。植民地体制下の強制栽培制度や奴隷制から、現代の多国籍企業が主導する国際貿易体制にいたるまで、コーヒーをめぐる歴史は、生産地と消費地の不均衡・不公正な関係に特徴づけられてきた。世界各地で何十億杯と日々飲まれているコーヒーが、栽培農家の生計向上につながっていないとの指摘はあとをたたない。

こうした状況に対し、フェアトレード、様々な国際認証、アグロフォレストリー、地理的表示（Geographical Indication）登録など、コーヒー栽培地の環境を保全し、栽培農家の生計を向上させようとする様々な取り組みが試みられてきた(Bray and Neilson 2017)。特に近年、持続可能な開発目標や企業の社会的責任が重視される中、国際認証（Rainforest alliance、UTZ、Fairtrade 認証など）を取得するコーヒー業者も増えている。これらの国際認証制度は、持続可能性を意識できる選択肢を消費者や企業に提供するという点で注目できる。しかし、いずれも国際機関・企業・消費者の視点から作られた制度であり、大元・佐藤・内藤(2016)は、生産者の視点にたった長期的な取り組みと資源への負荷の軽減に根本的につながっていない、と指摘し、生産者が国際認証制度を有効活用し、「飼いならす」重要性とそのために必要な要素を検討している。さらに、大元(2017)は、認証制度をより広義にとらえ、「顔の見える距離以上、生産者の思いを共有できる関係以内」の「中規模」のサプライチェーンに注目し、地域発信型の流通の仕組みとしての「ローカル認証」の意義と可能性を検討している。

本研究で注目するのは、世界第４位のコーヒー生産国であるインドネシアで近年拡がりつつあるカフェ・ブームと、それに呼応するかのようにコーヒー生産地で現れはじめた革新的な取り組みである。中でも特に注目したいのは、過去 10 年あまりの間に主要都市で増え始めた、インドネシア各地から生豆を買い入れ、焙煎にこだわり、バリスタが淹れたコーヒーを提供するスタイルの小中規模のカフェである。欧米に端を発する「スペシャルティ・コーヒー」「サードウェーブ・コーヒー」の影響を感じさせるこれらのカフェは、2015 年に公開され、人気を博したインドネシア映画「珈琲の哲学（Filosofi Kopi）」の中でも描かれ、インドネシア都市部の中産層の価値観と消費パターンに合致するものとして急速に拡がりつつあると考えられる。

こうした都市部での変化に呼応するかのように、コーヒー生産地でも変化がみられる。本研究で主な調査地とするスラウェシ島山間部のトラジャ地域は、インドネシアで有数のアラビカ豆の産地であり、申請者が 2000 年以来、断続的に調査している地域でもある。トラジャでは 2015 年前後から、トラジャ内の農家から直接コーヒー豆を買い付け、自家焙煎し、栽培地名をつけて販売・提供するカフェがオープンしたり、農民グループが協同組合を設立し、自ら生豆を選別、焙煎、カップテストし、インドネシア都市部へ栽培地別の生豆・焙煎豆を販売する事業を開始していた。”Relationship coffee”(Vicol et.al.2018) ともいえるようなこうした取り組みは、それまでトラジャでは見られなかっ

た動きである。

以上のような都市部（消費側）と農村部（生産側）でみられる変化は、これまで指摘されてきたコーヒーをめぐる不均衡な関係を変え、コーヒー栽培農家にいかなる変化を与え、より公正で持続可能なサプライチェーンをうみだしているのか。これが本研究開始当初の問題意識である。

２．研究の目的

本研究は以上を問題意識として、1) 民主化と経済成長が進行してきた新興国インドネシアにおける社会変化を、コーヒーを軸に、都市（消費側）と農村（生産側）の双方に視点を置いて動態的に捉えること、2) こうした変化が生産者・生産地域がより主体となり、公正で持続可能なコーヒーのサプライチェーン創出につながる可能性があるのか検討することを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、i) コーヒーをめぐる統計、制度・政策の検討、ii) インドネシア有数のコーヒー産地スラウェシ島トラジャにおけるサプライチェーンに関する調査、iii) インドネシア主要都市の一つ、スラウェシ島マカッサル市におけるカフェの実態調査、iv) 研究協力者や実践者との議論を通じた課題・視点の整理、を通じてアプローチする計画を立てた。当初、2020 年度～2021 年度の 2 年間の研究として計画したが、新型コロナ感染拡大による渡航制限により、現地調査が叶わなくなり、2023 年度まで期間延長と繰り越しを申請した。現地調査と調査許可取得の目途がなかなか立たなかったことから、ハサヌディン大学農学部の研究者らと共同研究チームを組織し、オンライン会議を重ね、現地調査を委託する形で進めた。最終年度にあたる 2023 年度にようやく調査許可を取得し、共同研究者らとともに、短期のフィールド調査を実施し、調査結果を議論した。

４．研究成果

主な研究成果は以下のとおりである。

1) 統計からみたインドネシア・コーヒー生産の特徴と動向

インドネシアのコーヒー統計によれば、コーヒーはインドネシアの主要農園作物の一つであるが、オイルパームは栽培面積の過半数が民間大規模農園であるのに対し、コーヒーは 99%が小規模農家によるものである。地域的には、スマトラ島南部（南スマトラ州、ランプン州、ブンクル州）では比較的低価格で加工用などに用いられるロブスタ種の生産量が多く、サードウェーブ系カフェで取り扱われることの多いアラビカ種はスマトラ島北部（北スマトラ州、アチェ州）および南スラウェシ州が多い。本研究で主たる対象とするトラジャは、高品質のアラビカ種生産地として世界的に知られる地域である。

2021 年のインドネシアのコーヒー生産量 786,191 トン、輸出量は 387,264 トン、輸入量 13,568 トンである。生産量は 1990 年代後半から約 2 倍に増えているが、輸出量は大きく伸びておらず、国内需要の増加が推察される。

2) マカッサル市におけるカフェの実態調査

マカッサル市は、スラウェシ島の南端に位置し、人口 145 万人（2023 年）を擁する、東部インドネシア最大の都市であり、流通・経済の拠点である。Haryanto（2016）は、

マカッサル市内に546のコーヒー店（コーヒー屋台からコーヒーショップまで様々な形態を含む）を確認し、4つのカテゴリーに分類している。筆者らは、2023年2月時点で、マカッサル市内でグーグルマップに掲載されているコーヒー店数は1191に及ぶことを確認した。量的な分析は現在すすめているところだが、フィールド観察とインタビューから、4つのタイプに分類できると考えている。すなわち、1) 1930年代から見られるコーヒー屋台（warkop）、2) コーヒーの他に食事やスナックも提供し、冷房・wifiも完備したカフェ（café, kafe）、3) コーヒー豆の品質や産地、精選・焙煎・抽出方法にこだわったコーヒー店（coffee house, coffee bar, kedai kopi）である。

本研究では特に、第三番目のカテゴリーに注目し、主だった20店舗のオーナーやバリスタへのインタビューを行った。インタビューからは、マカッサルでは2013年頃からコーヒーの抽出、焙煎にこだわり、良質の豆を産地から買いつける、さらには、生産者とともに豆の品質向上をはかろうとする取り組みが20代～30代の若い世代を中心に動き始めたことが明らかとなった。これらの動きは、1) インドネシア・スペシャルティ・コーヒー協会（SCAI、2007年設立）によるコンテストや研修などのイベント開催による普及と制度化、2) 映画やメディアによる「かっこよい」職業としてのバリスタ像、3) SNSなどを通じた発信、4) 都市化、民主化、経済発展に伴う「サードプレイス」に対する需要、などに複数の要因により促進されていると考えられた。産地・生産者との直接的な関係という意味では、特に、コーヒー産地としてはそれまであまり知られていなかった州南部のシンジャイ県、ブルクンバ県、ジェネポント県などで生産者と直接連携し、栽培・収穫・精製方法を改善しようとする動きが活発化していた。

3) コーヒー生産地トラジャでの実態調査

トラジャは、1970年代から日本の大手コーヒー会社が自社農園を拓き、高品質のアラビカ豆産地として国際的評価をえている地域である。慣習家屋と死者儀礼で知られるユニークな文化から国内有数の観光地でもある。

トラジャ（行政的にはタナ・トラジャ県、北トラジャ県、隣接するエンレカン県の3県）では、マカッサル市内の主なコーヒー店や焙煎所から買い付け先（仲買人など）を聞き、サプライチェーンを”川上”へと辿っていく形で、サプライチェーンを構成するアクター（大手コーヒー会社の農園2件、焙煎業者5件、農民組合4件、小売業者7件、仲買人4件、栽培農家27件）へのインタビューを行った。

インタビューしたコーヒー農家の特徴は以下のとおりである。年齢は35歳から60歳（主には50代）で、農地面積は1～2ha程度、コーヒー栽培を通じた生産と収入規模は限定的で、いずれもコーヒーからの収入だけでは生活は成り立たず、水田、家畜、商売、県外者からの仕送りなどを組み合わせ、生計をなりたたせていた。

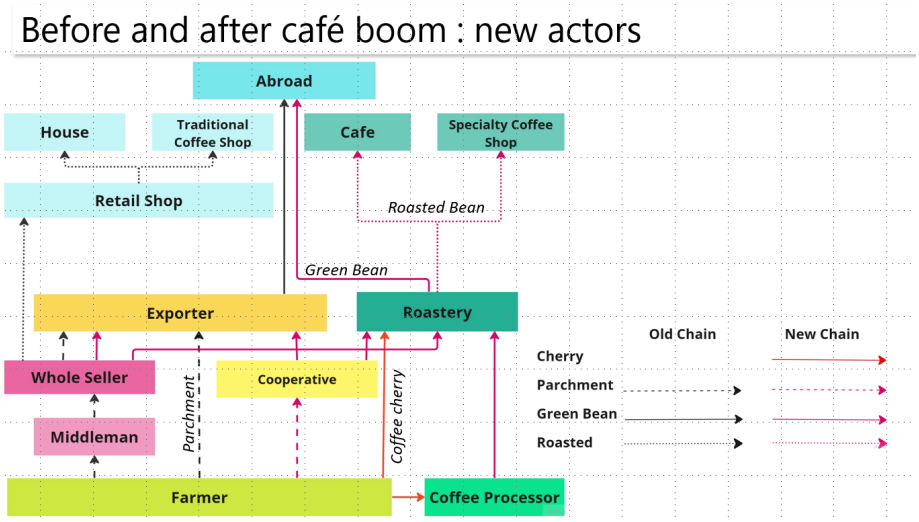
収穫したコーヒーチェリーが一杯のコーヒーとなるまでには、農家、仲買人、精製業者、コーヒー会社、輸出業者、焙煎業者、卸売り業者、コーヒー店などのアクターが関係している。

2002年にトラジャでコーヒーのサプライチェーンを調査したNeilsonは、その特徴として、川上のコーヒー生産者から仲買人、輸出業者へとわたり、さらに川下の焙煎業者、小売業者へと連なるサプライチェーンで、中心的な節点(central node)の役割を果たしているのは輸出業者だと指摘している(Neilson 2004)。すなわち、コーヒーは多数の生産者から、少数の輸出業者に集約され、多数の小売業者へと流れていくという構造である。

これに対し、本調査で見えてきたのは、アクターの多様化、サプライチェーンの多様化である（図 1)。特に、新たな展開として注目できるのは、コーヒー栽培農家らが農民組合を設立し、コーヒーの集荷・選別・焙煎・販売まで担いはじめたこと、「プロセッサー」と呼ばれるコーヒー精製業者が現れはじめ、プロセッサーとして、都市から農村部に移住する若い世代が複数確認できたこと、トラジャ内にも焙煎業者やコーヒー店が増え、その多くが県外に出ていた若い世代によるものであること、などである。

こうしたチェーンの多様化は、農家の選択肢の多様化であり、収入向上にもつながる可能性があると考えられる。ただ、筆者らが調査した 2021 年～2022 年はコーヒー開花時の長雨などで、どの農家もコーヒー生産が落ち込んだと語っており、サプライチェーンの多様化の影響・効果は限定的であった。また、先にみたように、トラジャのコーヒー農家の経営規模は大きくはなく、副収入的な位置づけにあった。コーヒー店としての起業、焙煎業者、バリスタ、プロセッサーなどへの若者の参入や農村部への移住・帰郷は見られたが、コーヒー農家への参入は極めて限定的であることが明らかとなった。

図 1: コーヒー・サプライチェーンの多様化と新たなアクター



出典: 本研究によりハサヌディン大学共同研究チーム作成

引用文献

Badan Pusat Statisik (2022) Statistik Kopi Indonesia 2021

Bray, Joshua G & Jeffrey Neilson (2017) “Reviewing the impacts of coffee certification programmes on smallholder livelihoods” International Journal of biodiversity Science, Ecosystem Services & Management

Haryanto, et. al. (2016) Keberadaan Warung Kopi sebagai Ruang Publik di Kota Makassar. *Temu Ilmiah IPLBI*

Hernandez-Aguilera, Juan N. et.al. (2013) Impacts of small holder participation in high-quality coffee markets: The Relationship Coffee Model. Paper prepared for presentation at the 2015 Agricultural & Applied Economics Association

Kementrian Pertanian (2022) Outlook Komoditas Perkebunan Kopi

Kementrian Pertanian (2022) Statisik Perkebunan Unggulan National 2021-2023

Kementrian Pertanian (2019) Statistik Perkebunan Indonesia Komoditas Kopi tahun 2018-2020

Neilson, Jeffrey (2004) Embedded Geographies and Quality Construction in Sulawesi Coffee Commodity Chains. Ph.D thesis submitted to University of Sydney

Vicol, Mark et. al. (2018) Upgrading for whom? Relationship coffee, value chain interventions and rural development in Indonesia, World Development 110, 26-37

大元鈴子・佐藤哲・内藤大輔(2016)『国際資源管理認証--エコラベルがつなぐグローバルとローカル』東京大学出版会

大元鈴子（2017）『ローカル認証—地域が創る流通の仕組み』清水弘文堂書房

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 島上宗子	４．巻 9
２．論文標題 コーヒーから見たインドネシアの都市と農村	５．発行年 2022年
３．雑誌名 世界の都市と地域	６．最初と最後の頁 22-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 島上宗子
２．発表標題 コーヒーから見たインドネシアの都市と農村
３．学会等名 令和3年度愛媛大学公開講座「世界の都市と地域」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 島上宗子
２．発表標題 インドネシアのカフェ・ブームとコーヒー栽培地域
３．学会等名 東南アジア・コーヒー研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 島上宗子
２．発表標題 レンバン復興：トラジャの「村」とは？
３．学会等名 トラジャZoom研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shimagami, Motoko
２．発表標題 What does a cafe boom in urban Indonesia bring about to coffee-producing areas? : Case studies from South Sulawesi
３．学会等名 インドネシア研究懇話会第5回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Sirimorok, Nurhady
２．発表標題 The rise of a new coffee culture: A case study of Makassar
３．学会等名 インドネシア研究懇話会第5回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Rampesela, Agnes and Oktaviani Nelsi
２．発表標題 How cafe boom in urban Indonesia affected the rural coffee growing areas? : A case of Toraja
３．学会等名 インドネシア研究懇話会第5回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kuno, Genta and Motoko Shimagami
２．発表標題 Archipelagic (dis)similarities in the temporality of warkop talks: An analysis of geo-tagged tweets
３．学会等名 インドネシア研究懇話会第5回研究大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関